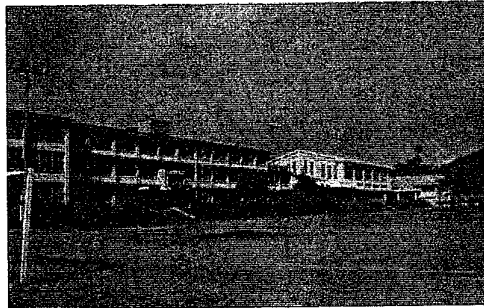


ふるさとの豊かな 海環境を生かす

鹿屋市立高須中学校



これからの教育においては、各学校の創意工夫を生かした教育活動の展開が大切である。とりわけ、ふるさとの豊かな自然や文化及び地域の人材・施設等による体験活動を通して、生徒、教師、保護者及び地域住民が「共に学ぶ」、いわゆる外に開かれた学校づくりの一層の推進が必要である。そこで、今回は、地域の特性を生かした学校づくりに取り組んでいる鹿屋市立高須中学校を取材し、活動状況や今後の見通しについて考えてみたい。

1 地域の特性

鹿屋市高須町の港は、かつては大隅半島の玄関として、最も栄えた港町であった。また、この地域は、寺社旧跡など多く、文化的先進地でもあった。

一方、海辺の施設や鹿屋体育大学の海洋スポーツセンター等が設置されているが、地域の特色を生かした「高須マリンフェスタ」等は、まだ緒についたばかりで、地域の特性を生かした次代を背負う「人づくり」の面ではこれからである。

また、ヨット学習の海域では、わかめ漁、いかひき等に従事している方々が、「高須の子供たちが取り組むヨット学習であれば積極的に進めてもらいたい。」と好意的にとらえている人も多く、地域の人材や施設等が学習活動に生かされている。

2 特色ある教育「浜・RUN・海～はまらんかい～」の構想

(1) 長期展望としての取組

ア 平成9・10年度、鹿屋市の研究指定をうけ「環境教育」に取り組み、研究公開を行った。その延長に立って、平成11年度（～H16年度）から海環境を生かした活動（海、海岸、施設、人材を生かした活動）の長期活動計画を進めてきた。

イ PART1（3か年）が「鹿屋体育大学の海洋スポーツセンター（以後体育大CWSS）との連携を中心にすすめる。

ウ PART2（3か年）が「情報教育を捉えた海環境を生かした交流」を策定し、「浜・RUN・海」～はまらんかい～と呼称した。

(2) 浜・RUN・海の活動内容

ア 白砂青松の浜田から高須に広がる砂浜を生かす活動

イ 海環境に関心をもち保全する活動

ウ 海に親しみ、海について理解し、郷土の理解と愛する心の育成を行う活動などの体験活動の総称であり、地域の砂浜（浜）を生かし、走るという言葉から、行動をおこし（RUN）、海環境を生かす取組から、さらにLAN（Local Area Network）として情報教育への取組への広がり示唆している。

(3) 浜・RUN・海の目指すもの

- ア 地域の特性、海環境を生かした活動を行うことによって、地域のよさや改善点を見出し、更に地域人材を生かし互いの学び合いの場とする。
- イ 自らの課題に向けて「がんばれ・一生懸命・本気に」という鹿児島の言葉（の方言で）で「はまらんかい」等で表現されるように、主体的に、学び、考える子どもの育成を目指す。
- ウ 自然の体験活動を通して感動のなかに燃焼し、判断力をもった行動力への期待を目指す。

3 地域社会を生かした実践活動「ヨット学習」

海環境を生かした体験活動を取り入れることによって、「生きる力」をはぐくみ、環境教育・国際理解教育・情報教育・ボランティア教育などを取り入れ、高須地区を取り巻く環境を生かした、活動が展開されている。

さらに、海環境に目を向けることにより、気候・気象・海象等の理的分野、艦装・ヨットの推進力等における準備の技術的分野、また操船することによって、体力、判断力、安全への配慮、の保健体育的分野「水辺活動」や「総合的な学習の時間」等の場が広がっていくと考えられる。

(1) ヨット学習に向けての事前研修

ヨット学習においては、まず水難事故等の安全のことがすぐ頭をよぎるが、安全についての十分な配慮と、子供たちへの指導と準備と対応とを行うこと、判断に当たって、早めの中止など細心の注意を払って行うことは必定である。

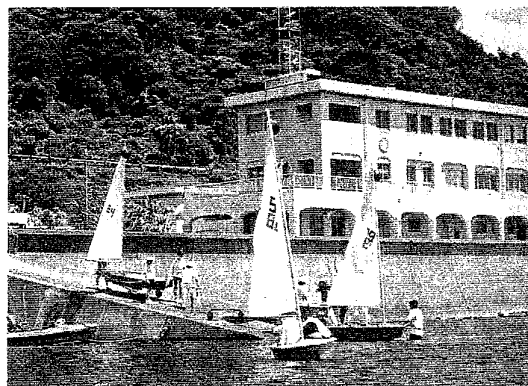
そこで、教師自身が、未知の世界であり、経験が必要であると考え、事前に鹿屋体育大学海洋スポーツセンターに赴き、研修し教師自らが体験した。

教職員の体験活動後、鹿屋体育大学 CWSS との間で、① 安全指導 ② 校内時間割

③ 天候判断等の問題点が指摘され、これらの課題から「安全・危機管理マニュアル」（鹿屋体育大学 CWSS 編）が作成された。

(2) ヨット学習の内容

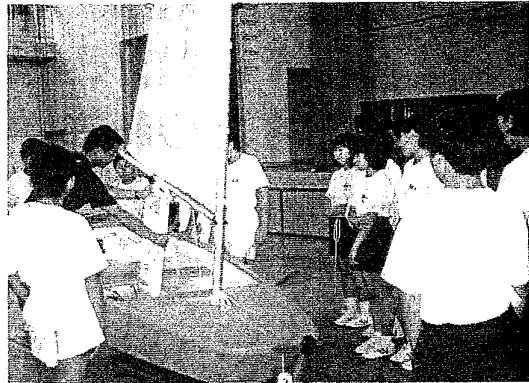
- 鹿屋体育大学 CWSS 発行のテキスト（中学生のためのヨット&カヌー）による事前の安全指導をはじめとし、
- ・ ヨット艇数や指導者数を考慮した、各学年毎の取組の人数への配慮



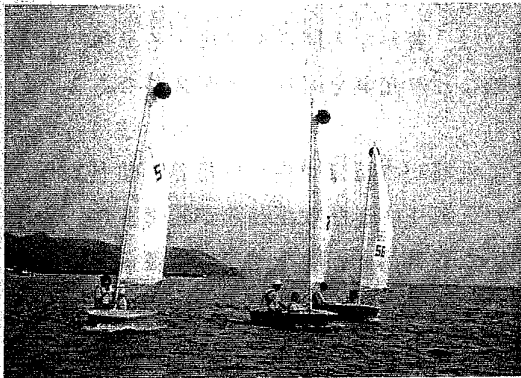
職員の体験学習

- ・ 指導者の認識と支援のあり方
- ・ 緊急時の組織的指導体制の明確化
- ・ 保護者への意義説明
- ・ 救命胴衣着用方法の徹底と浮力体験
- ・ ヨット機装の完全習得（ロープワークの習得）

などの安全対策を基本と考え、海での実践に出る。ここでは、自然の持つ力を知り、相互点検におけるヨット学習及び監視・救助艇の乗船への対応をはじめとし、各学年共通した、事前学習会（2時間）と体験学習（3回各3時間）の内容は次の通りである。



事前研修



風を感じ帆走

ア 1回目：事前学習会で習得した機装やロープワークを確実にを行い、実際に海でヨットを2人組で操作し、慣れる。

イ 2回目：2人組で協力し、風を感じながら操船や方向転換が行え、後始末もできる。

ウ 3回目：一人で風を感じながら操船し、直進帆走や、方向転換が確実にできる。

但し、2、3回目では、カヌーで、2人組で乗り込み、バトルを使い協力して直進や方向転換などの学習も体験する。

4 「浜・RUN・海」の「ヨット学習」の取材を通して

特色ある学校教育の「浜・RUN・海」のうちの一つである「ヨット学習」は、教育の場への導入は全く始めてであり、教職員の興味・関心の高揚、理解などを十分に行うとともに、安全指導への配慮を最大課題として進められてきた。

その中で、従来の学校観を転換させ、地域にある教育機関を利用した学習内容を教育課程に取り入れたり、人材の活用など、地域社会と共に学ぶ体験的な活動は、地域に開かれたこれからの学校教育に求められる特色ある学校づくりを進める中で特に必要なことである。海環境を通して、指導者が感動体験をしたことや教師と生徒が共通の体験で感動を共有したことなど、さらに、ふるさとの環境に対する認識が高まったことなど自立の意識を高めることにつながり、これまで見過ごしていた自然現象に関する、充実感や喜びなど活動意欲を高め、錦江湾のすばらしい海環境や地域社会、などを生かした、高須中学校の取組は今後さまざまな学習活動への展開が期待されるものである。

（教育経営研修室研究主事 永井和久）